

# 仲介される啓示と恩寵

## C.S. ルイス SF 三部作に見る中世・ルネサンスの宇宙像の影響

高田ひかり

### はじめに

C. S. ルイスの SF 三部作『沈黙の惑星を離れて』(*Out of the Silent Planet*)、『ペレランドラ』(*Perelandra*)、『かの忌まわしき砦』(*That Hideous Strength*; 以下 *THS*)において、人間は神＝マレルディル(Maleldil)と直接に対話せず、常に何らかの仲介者を通じてその意思を知り、その恩寵を受ける。天使的な存在であるエルディル(eldil)やその長であるオヤルサ(Oyarsa)だけでなく、一介の人間ランサム(Erwin Ransom)もまた、エルディルたちから伝えられたマレルディルの意思・恩寵を他の人間たちに伝達する役割を果たしている。本発表では、ルイスがこのように複雑な仲介システムを作り出したこと背景として、中世・ルネサンス期に絶大な影響力を持った偽ディオニュシオス・アレオパギタ(Pseudo-Dionysius Areopagita)の著作があることを指摘した。さらに、このような仲介を経て神の啓示と恩寵が被造世界に伝達されることによって、被造世界が受ける栄光がより豊かなものになるとルイスが考えていたことを確認した上で、特に *THS* においては、このような仲介によって伝達・拡散される啓示と恩寵を、現代世界の悪の問題に抗う力として表現していることに着目した。これにより、ルイスの諸テキストにおいて極めて重要な主題である他者との関わりという問題を新たな側面から考察した。

### 中世・ルネサンスの宇宙像：啓示と恩寵の仲介

先行研究が指摘するように、SF に示されたルイスのエルディルやオヤルサは、ルイスが『廃棄された宇宙像』(*The Discarded Image*, 1964; 以下 *DI*)で説明している、古代から中世・ルネサンス期に考えられていた天使像、特に、偽ディオニュシオスの『天上位階論』(*Peri tes ouranias hierarchias*)における天使の姿に影響を受けている(Brown 97-98; Petrucci 5-8)。偽ディオニュシオスは『天上位階論』において、天使たちには各々の神への近さの度合いに応じて「位階」(hierarchy)があるとし、これを詳細に考察した。そして、天使たちの内、上位の者は神から受け取った恩寵や啓示によって霊的に成長すると共に、自らが受けた恩寵・啓示を次位の者に分与することによって、その者の霊的成長を助ける、と説明している(“Celestial” 3.168A; 155)。

さらに、『教会位階論』(*Peri tes ekklesiastikes hierarchias*)からうかがえるように、教会の秘跡を通して、秘跡の執行者である上位の者から受容者である下位の者へと、人間同士でも啓示と恩寵の伝達が行われうると偽ディオニュシオスが考えていたという点は看過できない(“Ecclesiastical” III.3.444A-445A; 221-223)。すなわち、天使だけではなく人間もまた、秘跡の授受を通して、受けた啓示と恩寵を他者に伝える仲介者となることができることになる。ルイスの SF においても、マレルディルに近い存在であれば、その人間は周囲の被造物をマレルディルへと引き寄せる仲介者となることができる。例えば、『ペレランドラ』において、ランサムは金星の女性に出会うが、彼女は原罪前の状態にあり、ゆえに動植物と調和のうちに生き、彼らがよりマレルディルの意志に従う存在となることができるよう教え導く役割を担っている(*Perelandra* 201)。ランサムは彼女から地球の人類の本来あるべき姿を学び、彼自身が地球で同様の仲介者となるべく成長していくことになるのである。

こうした偽ディオニュシオスに代表される思想は、中世・ルネサンス期に絶大な影響力を持ち、ルイスの愛読書であったトマス・アキナスの『神学大全』やダンテの『神曲』にもその影響が見られる。ルイスが SF 三部作において、天使に類するオヤルサやエルディルだけでなく、ごく普通の人間であるランサムの仲介を経て人々にマレルディルの意思と恩寵が伝えられていく構造を作り出した背景には、中世・ルネサンスの宇宙像の影響を受けて形成された、彼のキリスト教思想があったと言える。

### ルイスの宇宙像の現代性：悪の問題と恩寵の仲介による和解

しかし、ルイスは単に中世・ルネサンスの思想家の宇宙像を模倣していたわけではない。ルイスの SF の中の宇宙像を見る時、中世・ルネサンスのそれとは決定的に異なる要素として、悪と対峙する力としての啓示と恩寵の伝達の重要性と、平凡な人々の霊的成長にルイスが着目した点が挙げられる。

先行研究が指摘するように、*THS* でルイスが描く悪の組織 NICE は、ナチス・ドイツや同時期の欧米諸国において流行した優生思想や形而上学的色彩を帯びた進化論の影響を受けており、人類の繁栄に不要な存在は排除し、科学の力で人間の不死を実現しようとする (Petrucci 11-23; Epplée 83)。それに対するランサムの共同体

は、同時代のそのような思想潮流に対するアンチテーゼと捉えることができるだろう。NICE はこのような思想を基盤として活動を展開し、神と人間、人間同士、人間とその他の被造物の関係の破壊へと導くのに対し、互いに啓示と恩寵を伝達し合うランサム共同体は、こうした他者との関係を改善・修復していくのである。

また、偽ディオニシオスが、教会内では位階の上位の者が秘跡を通して下位の者たちを引き上げると考えたのに対し、ルイスは一般信徒であっても霊的成長において優れている人は、秘跡とは異なる形で他者に啓示と恩寵を分与することが可能だと考えていた。ルイスの SF で他の人間たちに啓示と恩寵の仲介を行う人間ランサムや彼の周囲に集う人々は、いわゆる一般庶民なのである。説教「栄光の重み」(“The Weight of Glory”, 1941) でルイスは、くだらないとしか思えない人が、実は霊的成長において自分より遙かに先を進み、いつの日か崇拜したくなるほど神に似た者となる可能性があるということを強調している(*Weight* 45-46)。ルイスによれば、人は悪を伝え合うことで互いを腐敗へと導くこともありうるが、神からの啓示と恩寵を伝え合うことで互いを「神々と女神たち」(gods and goddesses) (45)にすることもできるのである。

人間による啓示と恩寵の伝達が可能だというルイスの思想の根源には、彼の救済観がある。中世・ルネサンスの宇宙像に示された、被造物同士による恩寵と啓示の伝達という思想は、そもそもキリストによって決定的なものとなったと考えられてきた。キリストがその死と復活によって、原罪によって神から離反した人類が再び「神の子」となる道を開いたというのがキリスト教の教義であるが、ルイスは、キリストが自らの死と復活をもって自身の永遠の命を人類にもたらしたことを「よき感染」(good infection) (“Mere” 144)と呼ぶ。救いは究極的にはキリストによってもたらされるが、全ての人間は何らかの形で互いにキリストという良い菌を感染させ合うことができ、これによって互いの救いを助けることができると言うのである。ここには偽ディオニシオス以来の霊的連帯の思想と、ルイスによるその展開を読み取ることができる。

人間によって啓示と恩寵が伝達される世界を描くルイスの SF テクストの背景には、人間が年齢や階級といったものとは無関係に霊的に成長し、他者に「よき感染」をさせることで、共に人類の本来あるべき姿を取り戻すことができるという、救いにおける他者との関わりに対するルイスの思想が存在するのである。

## 結論

このような SF 三部作の分析によって、全ての人間が諸天使を通じて神から受けた啓示と恩寵を互いに伝え合いながら霊的成長の道程を進んでいく世界こそが、この世界の本来あるべき姿であるとルイスが捉えていたことが明らかになる。また、特に *THS* において NICE が神と人間、人間と他の被造物、人間同士の関係を破壊していくのに対し、ランサム共同体がそうした関係を修復する結末に向かうことから、利益や効率化を追求する同時代風潮に対してルイスが抱いていた危惧と、それに対するアンチテーゼとして、自分が受けた神の啓示と恩寵を他者へと伝え拡散していくことが、破壊された関係の修復と和解の糸口となるという彼の考えが垣間見える。決して踏みにじることのできない尊厳を他者が持つことを認め、被造世界を通して自分に語りかける神の声に耳を傾ける、人間と他者の関係のあるべき姿を、ルイスは SF という形で表現したのである。

## 引用文献

- Brown, Janice. “C.S. Lewis and the Truth about Angels.” *Journal of Inklings Studies*, vol. 3, no. 2, 2013, pp. 97–110. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/45345279>. Accessed 12 Mar. 2022.
- Eplée, Nikolay. “The Center and the Rim: Inversions of the System of the Heavens in *Perelandra* and *The Discarded Image*.” *C.S. Lewis’s Perelandra: Reshaping the Image of the Cosmos*, edited by Judith Wolfe and Brendan Wolfe, Kent State UP, pp. 83–98, 2013.
- Dionysius the Areopagite. “The Celestial Hierarchy” *Pseudo-Dionysius: The Complete Works*, translated by Colm Luibheid et al., 1987, pp. 143–91.
- . “The Ecclesiastical Hierarchy” *Pseudo-Dionysius: The Complete Works*, translated by Colm Luibheid et al., 1987, pp. 193–259.
- Lewis, C. S. *The Discarded Image: An Introduction to Medieval and Renaissance Literature*. Cambridge UP, 2012.
- . “Mere Christianity.” *The Complete C. S. Lewis Signature Classics*. HarperSanFrancisco, 2002, pp. 1–178.
- . “Perelandra.” *The Space Trilogy*. HarperCollins, 2013, pp. 147–342.
- . “That Hideous Strength.” *The Space Trilogy*. HarperCollins, 2013, pp. 343–719.
- . “The Weight of Glory.” *The Weight of Glory and Other Addresses*. HarperCollins, 2001, pp. 25–46.
- Petrucci Courtney. *Abolishing Man in Other Worlds: Breaking and Recovering the Chain of Being in C.S. Lewis’s Ransom Trilogy*. Wipf & Stock, 2021.